

# 日銀の視点

やや汗ばむような陽気であつた5月中旬、東京から赴任すべく水戸駅に降り立った。水戸といえば水戸学発祥の地。今年は明治150年に当たるが、水戸学が江戸時代、特に幕末にかけて多くの人々に影響を与え、明治維新への原動力となつたことは、あまりに有名である。駅から事務所に向かう途中、銀杏坂を上りながら頬に当たる「水府の風」に教育的な伝統を感じた。

このよつな第一印象を受けたのは駅前で視界に入ったビルや看板の多くが、学習塾や予備校のものであつたからである。全フロアが全て塾、というビルもあつた。駅前の一等地に、これほど教育施設が幅を利かせている風景は珍しい。「予備校の街」といわれ、巨大な看板と林立す

日銀水戸事務所長 吉田 豊

る校舎が存在感を示していた東京の代々木駅前ですら、今や少子化のおおききを受けてかつての面影はない。

電話帳で水戸駅前の住所である宮町、三の丸に所在する学習塾と予備校を数えてみると、30件弱が掲載されていた。市内にある塾・予備校の約15%が、水戸駅前に集積していることになる。道理で看板が目立つわけ

都道府県ランキングではトップ10入りを果たしている。学習塾に行くことだけが教育ではないが、当地は教育熱心な土地柄といえよう。

水戸で迎えた最初の週末、旧藩校で日本遺産にも認定された「弘道館」を訪ねた。閑静なたずまいは江戸時代にタイムスリップしたよつで、藩士子弟になつた気分で建学精神が刻まれ

た弘道館記碑の拓本を目で追う。「弘道とは何ぞ。人能く道を弘むるなり」。当地の教育に対する情熱は江戸時代から脈々と続く歴史と伝統に培われ、後世の人々が不断の努力を重ねて、現代につながっているように思われた。

勤省が発表した17年人口動態調査によると、多くの都道府県で合計特殊出生率（1人の女性が生涯に何人の子供を産むかの推計値）が前年より低下した。しかし、茨城県の合計特殊出生率は1・48と前年（1・47）よりも上昇し、15年の水準に復した。前年よりもこの数値が上昇したのは関東甲信越地域では茨城県だけである。これで底を打って上昇に転じた、と判断するのは尚早かもしれないが、各方面で取り組まれている少子化対策

## 教育熱心さ息づく伝統

ある。ちなみに総務省の2016年家計調査によると、茨城県の一世帯当たり学習塾・予備校費用の年間支出額は3万7478円と全国平均を17%、金額にして300円ほど上回る。また、文部科学省が小中学校で実施した17年の全国学力テストでは、茨城県の正答率は66・0%で、全国平均を1・1割上回り、

昨今は教育を授けるべき子供の減少が著しい。6月に厚生労

が功を奏していることもあるのであろう。良い方向と捉えたい。夕方、水戸駅前でビルを見上げると、真剣な表情で鉛筆を走らせる制服姿が窓越しに見える。当地の若者が歴史と伝統に裏打ちされた志をもって、夢の実現に向けて勉学に励む。茨城県の未来は、きっと明るい。

（第2土曜掲載）